

第9期県民生活審議会第3回全体会（概要）

- 1 日 時 平成25年3月27日（水）14：00～16：00
- 2 場 所 県公館第一会議室
- 3 出席者 委員：鳥越会長、上杉副会長、上羽部会長、加藤部会長、根岸部会長、小西委員長、浅井委員、井原委員、岩木委員、木田委員、北野委員、滝川委員、田中委員、玉田委員、幡井委員、藤浦委員、古谷委員、恵委員、安平委員
県側：山内政策部長、横山県民文化局長、村上生活消費局長、川村生活消費局参事、竹内教育次長、手塚県民生活課長、横山県民生活課参事、竹村協働推進室長、石橋社会教育課長、県民生活課久戸瀬副課長、有吉県民生活課課長補佐、永園県民生活課係長、幹事課室、県民局、関係機関ほか関係職員

4 内 容

（1）政策部長挨拶

- ・この審議会は、第8期で示された方向性をさらに具体化するというテーマでご審議いただいた。これまでの会議でいただいたご意見をもとに、最終的な提言に向けて調整を行い、本日、審議会提言（案）をお示ししている。
- ・知事は、2月議会冒頭の提案説明で、地域づくりの原動力となるのはふるさとへの思い、誇りであるという考えから“ふるさと”づくりに重点的に取り組む旨を表明した。県では、新年度から知事を本部長とする「ふるさと事業推進本部」を立ち上げ、全庁的にふるさとづくりを推進していくこととしている。
- ・この審議会の提言を、これからの県の施策にも反映して、県民生活に結びつけられるよう努力していきたい。

（2）資料説明について

- ・事務局から資料1～3に基づき説明

（会長）

- ・前期の審議会では、人々の「孤立」の問題を全面的に出し、何とか「孤立」を防がなければいけないという流れであったが、今回は将来に向けてどうしていくのかという比較的夢のある発想に転じている。
- ・前期と比べて、地域の中に「家族」を入れて考える「家族重視」というところが今回の特色の1つである。
- ・当審議会が政策的に強く関わってきた県民運動や県民交流広場など過去の優れた蓄積を踏まえながら、第2章では現在の新しい事例を丁寧にみている。
- ・「ふるさとづくり」が今回の提言のキーワードとなっているが、これは過去に帰るのではなく、新しい“ふるさと”づくりをめざすものである。
- ・これまで当審議会では、基本的に「コミュニティづくり」を考え続けてきたのに、

コミュニティという言葉を使わず、“ふるさと”づくりという言い方をすることはやや危険なところがある。しかし、新しいものをつくっていくために、ここから今後の新しい有り様を考えていこうとするものである。

- ・本日の審議会が最終回となるので、委員の方々には、提言案の細部の表現についてのご意見も助かるし、提言案の修正意見ではなく、将来のふるさとづくりのあり方についてのご意見も歓迎する。

(3) 意見交換等

“ふるさと”の概念について

- ・“ふるさと”という言葉はコミュニティという言葉に比べてとてもソフトで、日本人の心にストンと落ちる、落ち着ける言葉と理解している。
- ・結婚により生まれた所から離れて暮らす人は、生まれた所を“ふるさと”として懐かしく想う気持ちとは別に、子や孫の“ふるさと”をつくるため、いま住んでいる場所を“ふるさと”と思うのではないか。
- ・“ふるさと”は新しいとか古いとかではなく地域の絆だと思う。家族だけでなく地域の絆が無ければ“ふるさと”は成り立たない。
- ・人によって様々に異なる“ふるさと”の概念の最大公約数的な要素を見つけて、それをどう育てていくかを考える必要があるのではないか。今の段階では、連帯感と歴史ではないかと思う。
- ・“ふるさと”という言葉には「うさぎ追いしかの山」の歌の世界に通じる郷愁めいた感じがあり、若い世代から見ると、何それ？という醒めた思いを感じるかもしれない。今回の提言が青少年に重きを置いていることは、とてもいい事であり、若い世代にとっての“ふるさと”を紡ぎ直すことになっていけばいいと思う。
- ・高齢者施設への定期訪問活動で交流している 80~90 代の方は地方から出てきた方が多く、“ふるさと”に対する想いがものすごく大きい。あくまで“ふるさと”は遠くに置いておくものであり、帰りたいけど、結局、帰らなかった。生産性・効率を追いかけた高度成長期を生きた人たちだと思う。
- ・若い人たちにとっては、“ふるさと”という言葉に、冷めてしまう場合もある。煙たいなどの側面があるのなら、今後“ふるさと”という言葉の使い方は、長所を生かしながらも問題点も意識しながら注意深く考えていかなければいけない。
- ・コミュニティは自分で選べるが、“ふるさと”は自分の思いとは関係なく生まれたところという感覚があるが、違いはそこだけで郷愁の想いは若い人にも無いわけではない。自分達がつくりあげるコミュニティが“ふるさと”になっていくという意味あいにまで落とし込めれば素晴らしいのではないか。
- ・「コミュニティ」は“ふるさと”の代わりになるような言葉ではないと思う。人と人とのつながりによって出来た結合体が「コミュニティ」であって、“ふるさと”は生まれたり育てられたりした自分の心に深く根ざした動きがたいものだと思う。
- ・一人ひとりが家族をつくっていき、地域をつくっていくのが“ふるさと”ではないか。“ふるさと”とは地域だと思う。
- ・生まれ育った所であっても、思い出もなく知った人もいないような所は“ふるさと”

とは言えない。思い出があって、人とのつながりがあって仲間がいる、というような温かい思い出の場所として、私たちは“ふるさと”という言葉を使う。

- ・今、東北地方や関東地方では、東日本大震災の経験から、いかにして自分たちの地域をいつまでも住み続けたい地域にするのかが大きな課題になっている。これは、私たちが阪神・淡路大震災以降から言い続けてきたことであり、今回、私たちが“ふるさと”という言葉を使ったのは思いつきではなく、阪神・淡路大震災の経験をふまえて“ふるさと”という言い方に至っている。

家族・地域の絆の形成について

- ・阪神・淡路大震災でも東日本大震災でも、私たちが強く思ったのは「家族」であり「絆」であった。社会が激しく変わる中で、家族が地域にどんな役割を果たせるか、あるいは家族の中で個人がどんな役割を果たしていけばいいのか、もう一度家族の役割を前向きに考えていこう、というのが今期の審議会ではないか。
- ・絆という言葉は、田舎に住んでいる人間にとっては「しがらみ」とも呼べる。しかし、今本当に必要なものは、実はそうした「しがらみ」というより人と人との本当のつながりだと思う。
- ・ずっと受け継がれていた温かい家族の形が高度経済成長の中で崩れていった。家族の絆を自分達で崩してきた歴史がある。これをもう一度つなぎ直すという意味で“ふるさと”は必要なものだと思う。
- ・今回の提言で、いかに家というものが大事かということをやっとクローズアップしてくれた。日本人には「家」というものがあって、それによって出来た“ふるさと”でもあるのではないかと思う。

“ふるさと”づくりについて

- ・平均5年ごとに家を替わる大都市部のサラリーマンのふるさとはどこなのかということを見ると、一人ひとりが役割を持って、役割を果たせるような、広く開かれた形で“ふるさと”をつくっていくことが大事である。
- ・「コミュニティ」と“ふるさと”は例えると「育ての親」と「生みの親」のようなもの。生まれ育った所と今住んでいる所が異なる時に“ふるさと”と「コミュニティ」の乖離が生じる。新しいふるさとづくりは、育ての親がいかに生みの親に近くなるかという取り組みであり、絆や心の問題に全面的に取り組もうとする大変意欲的で望ましい試みだが、大きな努力が必要。
- ・市町合併により、地域のお祭りや運動会が新市で一本化される中で地域の絆が失われつつある。「新しい“ふるさと”づくり」をどのようにして実現していくのか心配。
- ・地域に住んでいる人だけでは気づかないようなものが、外から来る人や外から関わる人によって再発見されることがある。このように外を内に活かしていくところに「新たな“ふるさと”づくり」の大きなポイントがあると思う。
- ・就職難の時代、なかなか職につけない若者が、そこに住んで地域コミュニティを通じて仕事をすればそこが“ふるさと”になるのではないか。そのような“ふるさとづくり”が、これからの1つの方向になるのではないか。

- ・今の若い人たちにとって、“ふるさと”というと、帰りたくない、煙たい、田舎というイメージがあるが、「コミュニティ」の表現を使うと、自分達で自立的につくりあげていくイメージがある。この時代の転換期に、「コミュニティ」イコール“ふるさと”という新しいコミュニティづくりをめざすという意味では、“ふるさと”と「コミュニティ」を合体させたような新しい形、呼び方が出てくれば面白いと思う。
- ・提言に“ふるさと”づくり、開かれたコミュニティを目指して」とあるが、正しくは「目指せ“ふるさと”」であり、今我々が住んでいるコミュニティを我々が思い描いている温かい“ふるさと”の姿にしようということだと思う。
- ・“ふるさと”とは1つではなく重層している、重なり合っていると印象を強く受けた。いろんなふるさとがある中で大事なことは、ふるさとの概念を構成している共通体験や連帯感、歴史、つながりなどをそれぞれの時期に経験していることだと思う。ふるさとづくりとは、このようなふるさとを構成している諸々のものを、今住んでいるところでどのようにしていくかではないかと感じた。
- ・もともと“ふるさと”イメージを持っていない都市部出身者や、地方出身者の中にも出身地から離れて暮らして地元に帰る気がないという人たちが出始めている。そういう自己検証の中で流動性が高まる中で動いていく人たちの“ふるさと”というか、安全安心な場所をどのようにしてつくっていくか、という議論は兵庫県にとって重要。提言に、キーワードは多様、柔軟、自立、創造と提案されており、このあたり重要なポイントで、これをどのように地域の中で具体化していくかだと思う。

“ふるさと”意識の醸成について

- ・以前、南あわじ市で「ふるさとを感じるのはどういう時か」とアンケート調査した際に、祭りに参加しているか、していないかで地域に対する“ふるさと”意識が違ふとの結果が出た。“ふるさと”意識をつくっていくためには、人と人との繋がりを作るツールとして、お祭りやイベントが必要だと思う。
- ・“ふるさと”意識のベースは、1つは人と人とのつながり、絆であり、もう1つはこの土地の自然であり、歴史であり、どういうまちであるのかという理解とか愛着という地域そのものとのつながりだと思う。その2つが噛み合っていて、地域に根ざしている、関わっている実感が持てた時、はじめて“ふるさと”意識が醸成されるのではないかと思う。

施策提案について

- ・行政に対してモノを言う審議会としては、提言の最後にある「“ふるさと”づくりの推進方策」をどれだけ具体的に書けるかが本命だが、県が具体的に何を支援するかがふれられていない。結果的に、第2章で様々な事例を検討して導いた素晴らしい方向性が推進方策に反映されていないところがたくさんある。具体的な施策の検討を次期審議会の課題としてお願いしたい。
- ・今の若い人たちに足りないのは“ふるさと”ではないかと思う。課題の箇所に孤独死とか自殺とか児童虐待とか、悲しい言葉が並んでいるが、これは自分の心のより

どころとする“ふるさと”が無いからではないのか。それをつくっていく政策が必要。

文章表現の修正等について

- ・提言案の“ふるさと”への想いの箇所が、観念的・抽象的な感じがする。施策に結び付けていくことを考えると、“ふるさと”への想いとは何に根差しているのかをもう少し機能的に整理することも必要。
- ・文章中、主語・述語が不明確であったり、曖昧な表現で文意が正しく伝わりにくい箇所がある。誰に対して何を県は言わなければならないか、という視点で文章表現を検討いただきたい。
- ・第3章の“ふるさと”意識を持つ」のところで、「家族の関係を結び直し、お互いに認め合う」とあるが、これは逆で、「お互いに認め合って、家族の関係を結び直す」ことではないか。
- ・第1章の表題に「現状と課題」とあるが、課題からこうしようと話をつなげるには、若干違和感がある。課題があるからそれに答えるということにどうしてもなってしまうが、そこはうまく繋がらない部分があるのではないか。

(会長)

- ・この結果は、副会長及び各部会長と話し合いながら修正し、知事への提言とさせていただきますので、ご了承願いたい。

(一同了解)

(4) 県民文化局長挨拶

- ・ご議論いただいたことを踏まえ、会長、部会長ともよく相談して、提言案文言の修正をさせていただきます。
- ・もともと8期の時にみんなの心のよりどころとなる場所やものが必要という議論をし、9期に進めた際、誰もが議論に参加しやすい言葉はないかということで“ふるさと”という言葉を引き出してきたと思う。
- ・提言を今後いかに施策の中で生かしていくかが重要であり、引き続きのご指導をお願いしたい。長期間にわたってご議論いただき感謝申し上げます。